



筑紫女学園大学リポジット

A Perspective on Contemporary Chinese Literature in Malaysia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/535

現代マレーシア華文文学への視角

石 其 琳

A Perspective on Contemporary Chinese Literature in Malaysia

Kilin SEKI

前 言

本論は、中国現代文学ジャンル「微型小説」の作品についての継続研究である。これまで中国本土を含め、その境外にある多くの華文語圏地域の作品を対象にしてきたが、今回は東南アジア地区において、シンガポールに続き（注1）、現代マレーシア華文文学作品を対象とする。

東南アジア地域には、世界中最多数の華裔人口が占められている、経済上において最も成功している華人地域とも考えられている。この地域の国々は、それぞれの歴史、政治上、華人と深く関わっている事実は無視できないし、同時に「華文」の存在が各国の政治政策と社会発展とも密接に関連している。よって、この地域の華文文学を見ることによって、それぞれ華人社会の現実と問題が何え知れると考える。本論は、これまでの研究同様、現代マレーシア華文文学の作品集《回家（家へ帰る）》（注2）を対象に、そこに収録された作家と作品の内容を具体的にとりあげ、その創作意識と問題点などについて考察する。作品を取り上げる前に、まずマレーシアの華文文学の歴史背景及び展開について理解を深めるため、以下説明を加える。

I マレーシア華文文学成立の歴史背景と変遷

世界において、華文文学を創作する作家の数は大勢いる、作品も多数存在するのだが、それぞれの地域性は相違する。東南アジア地区でも特にマレーシアに関しては、深刻な要因があったと考える。ここでまずこの点について考察する。

（一）華文文学創作意識の心理背景

華文文学の創作にあたって、当然華文を使うことが条件である。世界各地において、華人の移民が多数いるが、中でも東南アジアは最も華人口が多い地域である。特にシンガポールの人口構成は、華人主体の国であり、マレーシアも約4分の1が華人であり、現地の経済、政治において、常に重要な位置を占めている。華人の東南アジアでの移民歴史は古く、移民を続けた結果、現地の社会に溶け込んで、移民国の国民にもなったのである。しかしこの地域の移民は、ほかの欧米地域と違って、普段の生活でも華語を話し、華文教育に力を入れているため、華文創作ができ、華文文学が成立しているのである。ここでは《世界華文新文学史》の研究資料を引用しながら、さらにこの点について触れていく。

龔鵬程氏は華文創作の心理について、概ね次のように指摘している(注3)。欧米社会において、華人文化は主流ではない、東南アジアでは、華文文化は排除または同化、更に植民文化に抑圧される存在である。よって作家たちが社会に融合したいならば、当然その国の文学用語を使うべきであろう。生活の基盤である国なので、特別な理由がなければ、その国の言語は使いこなせるであろう。しかしそれにも関わらず、意識的に華文での創作をする場合、まず創作できるレベルの華文言語の習得も困難であり、読者層も発表の場も少ない。そのうえ創作成果が自己に良い名声をもたらせない反面、前途への妨害さえある状況下、敢えて華文創作を行うのは、作家たち自身が特別な心理要素を持っていると言えよう。

龔氏が指摘する東南アジア華人の移民における、特殊心理要素は言うまでもなく中国文化の伝統を維持することであろう。しかしマレーシアという国の現実的環境をみれば、この文化伝統を守るためには、かなり重層な困難が存在しているため、マレーシアの華人社会においては、従来一貫して幼児の華文教育を重視しているという事実がある。

華文創作において、華文の実力は欠かせない先決条件である。よって華文文学を検視するにあたって、作者の華文実力が問われるなか、現地における華文教育の問題と重要な関係があるため、その歴史背景と実際状況を理解する必要がある。この点に関して、別章で作品に触れながら考察する。またマレーシア華文文学の発展は、すでに長い歴史を経過している。以下はまずこれまでマレーシア華文文学の成立状況などについて述べていく。

（二）華文文学成立の時期と変遷

ここでは、研究資料を基に(注4)、マレーシア華文文学の成立背景及び創作の時期変遷について述べていく。マレーシアの華文創作は東南アジアにおける華文文学の最も重要な位置を占めており、従来「馬華文学」と呼ばれている。また《馬來西亞華人史》の記載では、第二次世界大戦以前から、マレーシア華文文学は既に深厚な基礎を成立させ、概ね五つの発展時期に分けられるという。

第一期は、1919年から1924年までである。この時期の作品は濃厚な僑民意識を帯びながら、創作の格調も高くないという。第二期は1925年から1926年までである。この時期は、南洋思想が芽

生える初期段階であり、創作に関して、その芸術的表現の視点からみれば、第一期よりレベルが向上したと指摘する。第三期は、1927年から1933年までである。この時期においては、現地の多くの新聞の副刊版面で作品を登載すると同時に、南洋色彩文学創作の基盤を固めることに力を入っていた。また時期的に、中国革命文学理論の影響を受けたため、当時新聞の文芸副刊では、文学の時代的使命及び大衆の需要が極めて重要視されたのである。第四期は1934年から1936年までである。当時の文壇は頗る沈寂状態で、文芸創作の表現も特徴性を見られなかった。しかし文芸理論の発展においては、収穫が豊富で、特に文学は「地域性」を持つべき理論と観点が提起されたのである。第五期は1937年から1942年まで戦前の馬華文学の最後の時期だという。この時期の文壇では、活力に満ち溢れている状況であるが、しかし時期的に中日戦争中であるため、文芸創作の内容は、対日抗戦救国が主なテーマになっている。そしてこの創作現象がこれまで徐々に育った「現地意識」の更なる進展を挫折させてしまったという。以後戦後の時代に入ると、その展開過程には政治的変動が大きな影響をもたらしていると推察できる。

1965年シンガポールの独立後、「馬華華文学」は「新馬華文文学」と名称変更したのである、以後華文文学の創作は、「馬華」、「新馬」どちらにも「本土意識（マレーシア現地を指す）」が重要視され、普通の「華僑意識」とは相対的であるという。ここで特に注目したいのは、この本土意識の展開動向である。そもそも移民の文学は、作家たちの創作活動が移住地へ本土化するの一般的な傾向であるが、しかし東南アジア各国において、華文は主要言語ではないので、たとえ創作内容が本土化意識を含むにもかかわらず、華文で書く以上、「非主体」文学の位置から外すことはできないのである。また50年代より、中国本土の政治状況から考えると、その環境が文学の自由な発展に適していないため、才能あるマレーシアの華文作家の多数は、台湾へとどまり、台湾文壇で頭角を現し、高名な作家として認められている。彼らは、台湾で活躍すると同時に、新馬華文文学の精鋭でもあった。当時作品発表する場も多数みられる。70年代を例にとれば、シンガポールとマレーシア両地域の新聞副刊の文芸版の他に、文芸雑誌も含めて数十種類が存在しており、文芸活動も活発に行っている。さらに1978年にはマレーシア作家（華文）協会も成立したのである。

マレーシア華文文学の発展時期の内容をみれば、ある意味でマレーシアにおける華文文学の発展過程とその創作内容の変遷が推察できる。今回取り上げる作品集の作家たちの生年をみると、最も年長者は1933年生まれであるが、それから推算すると、作者全員の創作活動が戦後50年代以後、現在までと考える。上述5つの時期に直接かかわることはないが、その名残として、マレーシアの現状につながっていることは否めない。

50年代以後世界の情勢、特に華文圏に関わる政治、経済などの変動も大きい上、社会状況の変遷に従って、作者個人の人生経歴と価値観、特に華人意識に関しての変化がその創作内容に大きく影響するであろう。この点に関して、東南アジア特にマレーシアに居住する華人意識（アイデンティティ）の変化について、現地の華文文学創作に重要な原動力であるため、その変遷過程を簡単に触れていく。

II マレーシア華人意識（アイデンティティ）の変化

マレーシア華人意識の変化をみるには、まずそれと深くかかわるマレーシア政府の華人政策を考える必要がある。それに関しては、外在的要素およびマレーシア国内で華人との関連事件などを理由に、数段階にわたって方針と内容が改定されている。

（一）マレーシアの華人政策について

マレーシアの華人政策について、いくつかの段階で見ることができる。1957年8月31日にマレーシアが独立して以来、1969年5月13日華人と現地マレー人の衝突事件発生までが第一段階と考える。初代首相トウシク・アブドゥル・ラーマン氏は自由放任の経済政策を実行している。基本的にイギリス植民地時代の継続であり、マレー人の政治、文化における特殊な地位を承認すると同時に、華人に対して政治、文化の地位と影響を削弱させるが、経済的には自由発展ができるようにしている。1969年5月13日マレー人と華人の激しい衝突事件の発生後、政府側は事件の原因が経済格差に由来すると考え、「新経済政策」を実施し、マレー人の経済上において優先地位を保ったのである。この時、経済だけにとどまらず、教育政策では現地へ同化させるため、華文教育に対して様々な制限を行ったのである。たとえば大学受験の入学者の定員に対し、民族配員を制限したため、多くの華人学生が落第し、海外へと進学する人々が多かったのである。このことはちに華人作家たちの海外への流失にも関連するが、また作品の内容にも反映されている。

1981年マハティール首相就任後、マレーシアの政治は安定し、経済も急速に発展している。華人の中小企業が受ける制限が減り、他民族同様の優遇策を受けられるようになった。20世紀90年代になれば政府の華人政策は転向をみる。華人のマレーシア国民の権利を肯定し、差別傾向のある政策が徐々に排除されたのである。1991年政府から第6回マレーシア大計画会議で「Wawasan 2020」というマレーシアは2020年までに先進国を目指す『ワワサン2020』が発表され、各民族の平和共存及び経済的制限も解消し、華人とマレー人の共同経営することを励ましながら推進すると同時に、海外進出にも力を入れている。

2003年アブドゥラ・ビン・アフマッド・バダウィ首相の就任後、最大の政策変化とえば、土地の有効利用のため、2004年マレー保留地を非マレー人へ開放する（使用期限60年）法律が成立し、以後華人は、農業領域での発展ができるようになったことである。またマレーシア政府は、中国本土との貿易が急速に展開された結果、80年代以前では華人たちの中国への進出が非常に厳しく制限され、当初は広州地区だけへの投資に限定され、華人の中国への親族訪問さえも65歳以上に制限されていたのだが、1990年に至りようやくすべての制限が撤廃されたのである。その後、マレーシア政府はそれまでのように広州だけに領事館を設置するのではなく、中国人のマレーシアへの入国条件も緩和したのである。1996年中国人はマレーシアへ72時間の無ビザ入境できるようになり、更にマレーシアへの移民は入境5年後永住が認められ、永住12年後にはマレーシアへの帰化もできるようになったのである。

上述一連の華人政策変化の過程をみると、華人たちのマレーシアという国での生活環境がいかに厳しいものだったのかがよく理解できる。そして移民から帰化するまで、華人としてのアイデンティティに対しての葛藤が深刻な問題だったことも理解できよう。この意識の変化は、特に華文学の創作にあたって、作家個人が直接に関わる人生観であり、極めて重要なテーマである。以下はその点について述べていく。

(二)「華僑」から「華人意識」(アイデンティティ)への転化

古から東南アジア地域へ移民した華僑は、20世紀の50年代第二次世界大戦後から、徐々に当地へと帰化し始め、東南アジアの民族 (ethnic group) の一つとして定着したのである。ここでまず「華僑」と「華人」と「華族」の意味について説明する。「華僑」とは、国外に居留する中国籍を持つ人をさす。彼らは居留国の永住居留権を持っていることもある。「華人」とは、中国国籍を持たず、居住国の国籍を持つ中国系住民である。「華族」とは、華人という民族群である。特に多民族国家において、居住国の中の一つの民族として生きることだと言える、特に東南アジア地域において、華人の人口がかなり多いところに、「華族」として、極めて目立つ存在になっていることが明らかな現実である。この「華族」(華人族群)の形成は、概ね50年代から80年代ごろである。研究資料(注5)によれば、この現象は、彼らの全面的現地化である。また東南アジアの華人意識として多元的(plural identities)なものとも考える。いわゆる当該移民国(民族)への政治的意識 (political identity)、華人文化への意識 (Chinese cultural) と華人族群 (ethnic Chinese) への意識の保持である。東南アジアの中国移民及びその子孫による住民社区の存在は、すでに数百年の歴史を経過している。彼らが東南アジアにおいて、華族を形成する前提は、政治的に当該国へ帰属することである。文化に対しては中華文化または華人文化を意識し、族群の分類では、華人族類であると考え。この意識転換情勢が定着し始めたのは、実に20世紀50年代中期からである。

東南アジアの国々は独立後、自国内の華僑の経済的優位と彼らが中国に対する強い帰属意識に不満を感じ、華僑を排除と差別する政策を推進しながら、現地へ同化させようと国民資格の取得を勧めていた。その同時期に中国政府も東南アジアの国々に良好な関係を維持するため、建国初期から華僑意識を積極的推進する方向から一転して、二重国籍政策を撤廃し、華僑たちに移民国の国籍取得を奨励したのである。よって、華僑たちは、居住国の政治的圧力と中国政府の政策転換の結果、大多数の華僑は移民国へと帰化するようになったのである。中でもマレーシアの華僑の意識転換が最もはやく、50年代末期までにマレー人の政治特権があることを条件に、華人らの帰化問題は解決されたのである。だが、実際にマレーシア社会においては、マレー文化と華族文化の融合度が低く、華人文化は社会において顕著な存在になっているのは事実である。

上述同研究資料によれば、東南アジアの華人族群が存続できる原動力は、この華人意識(chineseness)(同注5)であり、そして華人文化の核心基盤は、中華的価値観とそれに相関する習俗によって構成されている。華人意識の保持は、華人族群団結に不可欠の基礎であり、また他民族と

明確に区別する重要な要素でもあったと考える。

現在マレーシアの華人人口は600万余り、全国人口の四分の一を占め、概ね城市に集中している。マレー人が主導する政府の長期的マレー人優先の政策で、マレー人が政治的には優位な情勢にあるのだが、極端な排華政策は行っていないため、華人たちの経済的発展は持続的に成長している。彼ら自身もまた政府で公務を勤めることもできたのである。特に最近中国、香港、マカオとの経済活動が急速に展開したため、華人たちの経済的地位はさらなる上昇をみて、華人意識も一層加强されている。現在マレーシアにおいては、華人意識は長期的に持続できるであろう。だが、現実社会における様々な世代交代、移民またはその子孫、そして新移民も含めて、マレーシア国民として生きる上、様々な問題も潜んでいるのは事実である。次章は華文文学の創作にも深く関わるマレーシア社会における華文教育の問題を考える。

Ⅲ マレーシア華文教育の歴史背景と問題

華文文学を語るには、まず華文で創作するのが先決条件である。従来マレーシアの華人社会において長期的に華文教育と華語の使用に執着した結果、その華文レベルは東南アジアのトップクラスの地位を占めていたのだが、それはマレーシアでの華文教育が、実に長い政治的障害の過程を経ての結果であり、現在まで多くの成果を達成できたのである。同時に移民世代とその子孫が直面する現実の多くの問題を抱えているのが事実である。以下はこの点について述べていく。

華文教育は華人の民族特性と感情を維持するに不可欠の要素である。現に華族はマレーシアでは第二大の族群であるし、現地華族の共通語であり、華人社会の主要用語である。他に印刷媒体と電子媒体はマレーシアでは大変普及されている中、中国国外における華文新聞の発行種類が最も多い国家である。華文新聞は22種類、華文期刊類は63種が発行されている。有名かつ発行数の多いのは《星洲日報》、《南洋商報》、《光華日報》、《華僑日報》、《東方日報》、《国際時報》、《亞洲周刊》などがある。主な華文新聞の読者は230万人、華語ラジオ、テレビ放送も多い。

マレーシアの華文教育は、「漢語」（中国語の標準語）を母国語として教育することである。1819年最初の私塾五福書院がペナンで建校されて以来、約200年の険しい道を歩んできたのである。現在マレーシアで華文小学校1292校、華文独中（中学校）60校、華文民間設立学院（大学：南方学院、新紀元学院、韓江学院）が3校設立されている。この現状から、マレーシアの華文教育は、現在中国本土、台湾、香港とマカオ地域以外、唯一幼稚園、小学校、中学校、大学などが完備された華文教育体系が整えられていると、多くの研究者から指摘されている（注6）。同資料によれば、マレーシアの華文教育は、移民初期から概ね5段階に分期できると考える。以下各時期において特重要事項について、簡単に説明を加える。

（1）18世紀初から19世紀までの萌芽期

マラッカ王朝成立後100年の15世紀初頭、華族社区が既に存在したのである。後に南へ遷移し

18世紀初期のペナンには7558人の華人が居住していたという。早期の華人は貧困のうえ教養にも欠けていたのだが、子供たちに教育を受けさせるため、私塾で方言（広東、福健地区）教育を始めたのである。しかし単一方言による教育は問題が多く、その結果20年代より普通語（中国語の標準語）の華語を教えることに変わったのである。1924年イギリスの植民地支配下、登記学校に関する法律を提示したのだが、教科書と教師に厳しく制限があり、華文学校の発展に大きな障害となっている。反面華文教育団体が封殺されたにもかかわらず、逆に法令に沿って、華文学校が合法化し、華族がそれ以後の長い華文教育の道のりで、政府からの圧力に対抗すべき原動力となったのである。

（2）独立前の時期（1940—1957）

まず日本占領期では、華校がすべて閉鎖されたのである。戦後イギリス支配に戻ってから、数回にわたって、多数の教育政策を提案し実行する中、華校の教育は廃止される寸前の状態に陥り、完全に不利な状況に押し込められたのである。

（3）独立後の時期（1957—1970）

この時期の政府は、マレー民族主義の台頭にともない、華文教育を消滅させるため、「教育マレー化、教育現地化」提唱したのである。「1957年教育法令」が公表され、マレー語が国語であると同時に、非マレー語と文化の発展も維持し、支持するという。しかしこの法令は短期間で単元化教育の法令に取って代わられてしまったのである。1961年、教育法令を發表後、「華語小学校」が「国民小学校」へ改制され、華文学校の数が一気に減少したのである。そのころ、中学校も様々な制限を受けた結果、政府の補助を受けずに「独立中学校」という形で継続することになったのである。

（4）新経済発展と新政策時期（1970—20世紀末）

20世紀70年代より、マレーシア政府は華文教育に対し、同化と制限政策を行ったため、マレーシアの華文教育は不振に陥ってしまったのである。1970年から1990年に新経済政策が実施され、マレー語が教育用語の地位を確定され、英語を第2公用語で、華校の教科書内容綱要もマレー文のものに準ずると規定されている。更に中文教育を「中国化」（北京語を基準）へと規制したのである。後に3Mという華校には数学と華文の授業以外マレー語で行う規定を發表したのだが、華族から強い抗議を受けた結果撤回を余儀なくされている。1990年、政府は「新発展政策」を実施し、国際、国内の環境変化下、マレー人優先の政策を緩和したのだが、教育政策に関しては、「Wawasan 2020」政策の發表によって、「宏願学校」という学生は民族、宗教に関係なく同じ学校で学習すると考えたのだが、これまた反発を受け、現在全国で2校だけである。大学教育に関しては、80年代華人の努力と華人団体の政治的影響により、政府はマレー人と非マレー人の国立大学の入学比率を55：45民族の人口比率に近い数字に変更し、更に華文大学2か所の設立を認

めたのである。

(5) 21世紀から現在まで

21世紀に入っても、政府側は新たな教育計画を発表し、その単元化教育目標を強調している、よって華語小学の数はさらに減少したのである。2011年4月27日中国の総理である温家宝がマレーシアを訪問した際、「馬中（マレーシアと中国）学位相互承認協議」を結び、学歴と学位を承認するほか、学生の交換計画もたてている。これより両国の文化、文明を高等学府において相互尊重を示したのである。更に2008年全国大選後、50年間政権を続けた与党が人民連盟に敗北し、5つの州の支配権を失ったため、政治力の分化が露呈され、この現実から華文教育にも転機をもたらし、華校の建設に資金支援と土地の提供を助長したのである。しかし、マレーシア政府が教育文化の「単元化」を欲する目標を捨てない限り、華族は将来的にも華文教育問題に対して樂觀視はできないであろう。

これまで述べてきたように、マレーシアの華人社会にとって、華文教育の問題の他に、マレーシアという社会の多方面において、移民自身の世代、出身、生き方と人生観などに関係する現実問題も多数介在している、それは常に華文文学作品の描写テーマであり、その表現からは地域の特徴も見られる。以下は本論が取り上げたい作品集について、その編集宗旨と構成などについて分析し、作品集からいくつかの作品を取りあげ、上述した多くの問題点を考察する。

IV 作品集《回家（家へ帰る）》について

(一) 作品集の編集背景と目的

風

今回研究対象として取りあげる作品集は、2014年に出版されたマレーシア微型小説の作品選集である。作品集に収録されたのは153篇で、作者の数は76人である。云里氏（マレーシア華文作家協会元主席）が書いた序文によると、1987年中国福建省廈門市が定期的に行った「東南アジア華文文学研討会」の開催を発端に、東南アジア各地のシンガポール、タイ、フィリピン、ブルネイ及びマレーシアなどの華文文学作品を研究対象として、多数の論文が発表され論集が出版されている。これに起因してマレーシアの華文文学が中国の文学界において、注目され始めたという。以来、数か所の大学にはマレーシア華文文学に関する研究センターも設立されている。今回取りあげる作品集の主編を務める欽鴻氏は、マレーシア華文文学に関する評論を百篇近く書いた高名な研究者であり、この作品集も同氏の一貫した研究を基に編選され、中国で出版されたものである。

主編の欽鴻氏が作品集最後の「編後」に、この微型小説作品集の編集主旨と目的について、概ね次のように語っている。文学は生活の反映である。微型小説（ショット・ショット）が文学の様式として古くから存在しているが、現代生活のリズムが速くなり、生活の圧力がますます重くなる状況下、創作がより盛んになったのである。長編の創作も多く見られる中、より多数の作者

が創作できるため、この短小で精練された形式が歓迎されている。この現実から東南アジアの国々における華文「微型小説」及び「短詩」の創作が盛んになった理由と考えられよう。しかし「短詩」の作品よりも、小説は人物や物語があり、反映する思想内容は、短詩よりも豊富で、広大な読者層に受け入れやすいであろう。よってマレーシアの華文文学作品を中国の読者に紹介したいと考える際、まず現在のマレーシア文壇において、隆盛な微型小説の作品を編選すべきだと考えたのである。

マレーシアの華文微型小説の創作実態について、同氏は現在マレーシアが華文微型小説の「創作大国」と言われるほど、東南アジアをはじめ、または世界の華文文学においても大変重要な地位を占めると同時に、広汎な影響を与えているという。マレーシア華文文壇において、微型小説の創作の従事者は極めて多く、有名な小説家の他に、本来ほかの文学ジャンルの詩人、エッセイを中心に活躍している作家たちもこの創作領域に参入している。中には文学界の先輩作家たちの創作活動の他に、多数の青年作家たちも活発である。これら若い作家たちの創作は、新鮮な視角、思想及び表現方式を取り込み、マレーシア華文文学の質を高め、影響を拡大するに重要な役割を果たしているという。そして、この選集を編集する目的は、マレーシア華文文壇微型小説の創作の面貌を明らかにし、中国本土の読者が作品に反映されたマレーシア社会生活の現状と動態を理解でき、中国とマレーシアにおいて、文学と文化の交流を促進できることより、さらにマレーシア華文微型小説の創作の励みになればと期待している。

(二) 作者の構成について

この作品集の作家構成を検討することで、作品の内容に関する様々な特徴が明らかになると考える。ここでは2点ほど取りあげたい。

その1：まず年齢層から見れば、最も古い世代では、1930年代生まれに対し、最も若い世代では1996年生まれである。この世代の差は作品の創作テーマからもある特徴がみられる。要するに年齢から、異なる政治、歴史と社会生活が反映された人生描写が多くテーマになっている。また中間の年齢層の作家たちには、マレーシアで生きる華人として見れば、移民と現地生まれの混在世代であり、彼らの問題もほかの世代と相違するところが見られ、それぞれの感情と成長環境の相違によって、自ずからその創作特徴が顕著にみられる。

その2：作者の出身について、収録された各作品ページの冒頭に簡単な各作者の履歴を記載している。その記載方法から、ある特徴がみられる。1930年代から70年代ごろまで生まれの作者たちに関して、祖籍が中国広東省、福建省、海南（中国の特区の一つ）などが明記されているが、実は現地生まれ育ちがほとんどで、彼らの華文教養は現地の華文教育によって鍛錬されたのであろうし、また少数だが、成人後にマレーシアへ移民した作者もいる。1970年代以後、現地生まれ育ちの作者たちについては、祖籍は一切記載しなくなったのである。ここからも作者たちが抱える華人という意識及び社会問題への視点、さらに人生の価値観などの相違性がうかがえ知れる。以上の2点はマレーシアの華文文学を考察するに無視できない基盤的要素と考える。

V 作品にみる華文意識と華文教育問題の描写

これから取り上げる作品について、内容の紹介を含めて、作品を簡略訳し見解を述べていく。

作品① 「帰郷の魂」 丁云 作 (1952～)

福永おじさんは、過労でなくなると噂されている。享年54才だった。

彼が死んだとき、4人の子供と一人の息子嫁は、みなほっとした雰囲気嬉しそうな笑顔で葬式をとり行っている。ただ二人の幼い孫が線香を持って祭拜した時、線香の火傷で大声で泣き叫んでいる。母親は子供が泣き止むように必死に止めていたので、霊堂のわずかな悲しい雰囲気も消えてしまったのだ。甲問に来た親戚の人たちは、この葬式の違和感に物議を始めた。

「この親不孝のやつらが、父親が亡くなったというのに、涙もみせず逆になら笑っているではないか？罰当たりが」と怒っているのだ。

「財産分けを待っているのだよ。老人が早く死んでくれと願っているよ！」

「財産？福永おじさんは、一銭もないのだ。どこにも財産なんかないのよ！」

「あそこの土地よ！あなたは知らないのだよ。この頃景気がよくなって、カプロ通りあたりは発展し続けているから、以前200円で買った泥地が、いまは20万に値上がりしたのだぞ・・・」

福永おじさんの遺影は少々感慨深い表情のように見える。彼は唐山（福建、広東地域を指す）から来たのである。戦争が始まった年、ゴムの売値がよくて新妻を田舎に残し、出稼ぎの波に乗って、南洋でお爺のゴム園へ働きに来たのだが、ただの廉価労働力として使われたことを知って、立腹してすぐにやめて雪洲（Selangor）の荒野地へ開拓に来たんだ。

子孫は葬服を着用して、列で田舎道を歩み、橋を越え、古いゴム園林を通りすぎ・・・山溪でバケツ一杯の清水を汲み上げ、ゆっくり、静かに自宅へ向かった・・・途中、遺族の表情は依然として、愉快的微笑を帯びながら、あたかもピクニックにでも行くようだった。そして福建省の習慣に沿って、長男がタオルをそのきれいな水に濡らして、丁寧に父親の遺体を洗浄し、きれいに拭いたあと経帷子を着せた。

福永おじさんの表情はすごく穏やかで、亡くなる前に、もう一括千金でお金持ちなるという夢が破滅だったことを覚悟したようだ。福建省の田舎で留守番をしている妻と子供たちは毎年首を長くして待っているのは、彼が年2回の家族あてにだす手紙であり、逆に南洋にいる彼は、まだこつこつ3エーカーのカカオ園を守って、泥と工業ごみに埋もれてしまわないため、過酷に働き続け亡くなってしまった。彼は永遠に里帰りができなくなったから悔しいだろう・・・

道士は大声でお経を読みながら法事を進行させているが、息子と嫁たちは依然として笑顔で、悲しい表情は一切出さなく、甲問者たちの饒舌も続いている。

「福永おじさんにもしお金があれば、とくに里帰りして、妻と子供に会いたいだろう・・・あんたたち知ってるかい？彼は死後家郷に骨を埋めたいといつも夢見ているという・・・」

「ああ（溜め息）・・・あの不孝の息子と嫁・・・しょうがない、半唐番の女を娶ったからね。」

「半唐番？半唐番だって人間だから、葬式に泣かないのは、どう見てもおかしいわよ。」

葬式は終わり、遺族はお墓の前に立って、経帷子をぬき冥紙と一緒に燃やしてしまった。最後に笑顔でお線香を挙げて墓に拝んでから離れ去ったのだ。葬式後帰宅して、息子と嫁たちは父親の霊前で跪き、もう一度線香を付けて手を合わせた。「お父さん、あなたの指示通り、葬式の間では悲しく泣くのを恐れ、占い師の言うように、遺族が泣き、あなたが振り向けば、唐山への帰り道に迷ってしまうから・・・」この時嫁と子孫たちは、やっとこれまで抑えていた悲しみの涙があふれるほど号泣したのだ。

この作品について、まず作者は福永おじさんを早期移民の姿として描写した内容と考える。中でも特に注目したい点が二つある。まず上述したマレーシアの政治、歴史および社会の現実より、彼らは生きるために家族を田舎に残しながらも、また現地にも新たに家族を持ちつづけ、その妻は現地の華人との混血女性である点に何らかの理由が存在することであろう。彼らのような出稼ぎする弱い立場の移民が現地に留まるために、困難な事情背景があったと一般的に推察できる。そして彼ら同様、世界中の華人たちの苦難な人生の一側面であると反映した表現ではないかと考える。次は葬式中に家族が悲しみをガマンして泣かずに作り笑顔で過ごした点について、福永おじさんは福建地区の習慣として、死者の魂が故郷唐山への帰り道に迷わないために泣かずにガマンする習慣を守るために、家族に指示した描写からは、正に上述した華人意識への執着の表現であろう。実際この作品は、今回取りあげる作品集の一番冒頭に収録されている作品である。ある意味では、華人意識を強く表現する代表的な作品であると言える。作品集に収録された作品のなか、「山の上に物語が多い」（陳政欣 作1948～）がある。その主人公は、父親が埋葬されている華人の墓地を訪れて、そこに多数の華人たちの生涯を父親の悟った口調で回憶し、その奮闘と苦労を語るのである。作品の最後の付録に、作者は、現在はただ一本の道で、97番のバスしか行かない実在する墓地について、説明を加えている。すでに荒野地になっているのだが、昔から墓地周辺の4、50キロ範囲は多くの華人がここへ埋葬されている。墓は、華人にとって、現地で生きた痕跡である。よってそれにまつわる様々な思いを作者の創作のテーマと舞台として登場するのである。以下もう一つ墓に関するテーマの作品を取りあげ、華人社会における別の問題を考察する。

作品② 「お墓参り」 草風 作（1944～）

2人の英語教育を受けた息子は、毎年清明節前には必ず仕事の休暇を取って、外地から戻って、父親と一緒に山へお墓参りをする。毎回お墓参りに必要な線香とお供えの物などは、全て父親が準備している。親孝行の二人の息子は、父親の後ろについて、その指示通りに動けばいいのである。

今年の清明節前、年老いた父親は体調をくずしたため、二人の息子だけでお墓参りにすることになった。しかし、朝早く出かけた二人の息子は、昼前にお参りの供え物を持って、そのまま持つ

て戻ってきたのだ。父親は驚いて質した：「お墓参りに行かなかったのか？ 渋滞だったのかい？」

息子たちは口を揃えて、「僕たちは行ったけど、祖先のお墓は見つからなくて、義山墓地には似たようなお墓がたくさんあって、中文を読めないし、ずっと探したけれど、見つからなくて……」

老父は頭を横に振って、溜め息をつきながら「あー、お前たちにはあきれてしまったね。ちょっと待って、わしが薬を飲んだら、また連れて行くから……」

この作品も作品①同様墓に関係する内容である。墓と言えば、人生の最後の場所であり、自分の魂が落ち着くところでもあろう。毎年清明の季節に墓参りをするのは中国人の習慣である、華人たちは、他国へ移民して、現地の国民になったにもかかわらず、華人としての意識保持は、死後にも貫くのが華人社会によく見られる傾向である。しかし作品②に描写したように、上述したマレーシアのこれまでの歴史、政治及び教育の多様な政策が推進された結果、華文教育の存続問題が深刻で、華人の子孫にもさまざまな選択が強いられたのである。実際作品に描写された二人の息子のように、英語教育を受けて、華文教養が全く身につけていない世代が増えている現実がある。彼らにとって実質的には華人であるが、華人意識の継承は「華文」という壁に突き当たってしまい、完全に伝承することは、親の世代が亡くなることにつれ、より一層困難極める状況に陥るのである。マレーシア生まれの作者草風氏の年齢から、まさに華人たちが華文教育を必死に守ろうとする激動的なある時期を経験した世代と推察できよう、また彼がこの作品に託した思いと期待は、無念さだけではあるまい。

さて、墓参り習慣から、華文教育が置かれた不利な状況とその後遺症を描写する作品に続き、現在華人社会における子弟の言語教育の問題を描写した作品を取りあげる。

作品③ 「愛君の言語学習」 年紅 作 (1939～)

愛君の顔には、二つの可愛らしい笑窪がある。笑うととても愛嬌がよくて、幼い時からいつも笑顔でとても人に好かれるのだ。学校が始まって、彼はとても嬉しくて、笑顔も一段と可愛くみえた。

「ちゃんと勉強してね、将来は“三ヶ国語”話せるバイリンガルになろう！」ママは嬉しそうに彼を励まし、「いま時は、華語、英語、マレー語みな重要なのよ！」

「ママ、僕は絶対にちゃんと勉強するよ。」

しかし学校に入ってから、愛君の笑顔が暗くなり、だんだんと消えていた。

「学校で、誰かにいじめられているのかい？」

彼は頭を左右に振って、急いで教科書とノートを大きなカバンに押し込んでいる。

「先生に処罰されたのかい？」

彼は、急ぎながらファイル、ノート PC をエコバッグに入れた。

「どうしてこんなに不機嫌になったの？」彼の困惑した顔を見て、不安になった：「何かあっ

たら、必ずママに言うのよ、助けてあげるからね。」

「無理だよ」彼は呟いた。

「どうして？」

「“学校” だったり、“Sekolah” だったり、“School” だったり……」

「ああ、華文、マレー語、英語は当然違うのよ！」

「華語の先生は“pen” の漢語発音は第2声で“盆” と読み、洗面のたらいだと思ったら、マレー語の先生と英語の先生は“万年筆” と言うし……」

「間違いないよ、“盆” は“盆” で、“万年筆” は“万年筆” なのよ。」

「じゃ、“bantu” は結局“半途” なのか、それとも“助ける” なのか？」

「私に混乱させないで。」

「まだあるよ、マレー語の先生は、どうしても“牛車” を“車牛” と言うよ！」

「語学の勉強は、忍耐力が必要なの！」

「忍耐力はわかるけど、僕は勉強すればするほどイライラするし、ますます混乱してしまうよ！」

「ママはもっと何人かの補習できる先生を探してあげるわ。」

「今日マレー語の先生が単語を教えた、僕の名前を呼んだ時、彼は“Air” は“水” だと言い、お茶を入れたり、ご飯を炊いたり、または洗濯、茶わんを洗うのに欠かせないもので、人類にとって重要なものだと。」

「そうなの？」

「しかし英語の先生は、“Air” は“空気” だという。さらに人は空気がなければ死んでしまうよね！」愛君の目に涙が浮かんでいる。「ママ、僕の名前は“水” なのかそれとも“空気” なの？」

「いいえ！」私は彼を抱きしめて、「あなたは“愛君” ！ママのお宝なの。」

「ママ、ほくはバイリンガルにならなくてもいい？」

私は彼をもっときつく抱きしめて、「ママは、あなたの笑顔だけが見たいのよ……」

この作品の作者もマレーシアの華文政策の苦難な過程を経験した世代であろう。いま世界の変化に伴い、その言語政策から多くの問題をもたらしている。作者はその現実を面白く、おかしく描写している。作品内容の現象は、移民且つ多民族社会においては、ごく一般的な体験だとも考えられるが、現に若い世代の華人子孫にとって、華人意識を保つためには、華文教養が欠かせない重要な条件である。だが激動する時代の変化は容赦なく、上述したように、マレーシアの華語学習環境は備えているにもかかわらず、華文学習のむずかしさの一側面がこの作品からもうかがえ知れる。

ここでマレーシアを含めて、華文創作の言葉使用に関して、ある重要な特徴を考えたい。

作品④ 「ヘビースモーカー」 李志平 作 (1986~)

黄昏の時間で温桂はバスを待っているが、いつ来るかわからないので、ガマンできず、タバコの火をつけて吸い始めたのだ。ちょうどバスが来て、乗った瞬間、切符売りの車掌さんから「禁煙です」と警告をうけたのだが、かまわずに喫い続けた。すると車掌は彼のたばこの箱を取りあげて通路に放り投げ、さらにそれを後方の乗客の足元まで放ったのだ。ほかの乗客も車掌を助けるようにあちこち回し、まるで車内がサッカーの試合の様相。そのうち蹴られたタバコは窓から車外に飛び出し、ちょうど通りかかった自転車に踏みつぶされてしまった。彼は運転さんに大声で「停車…停車…」と叫んだが、無視され、運転さんに「なぜ停車しないのか？はやく停車してよ…」と。その時ある乗客から「これはバスなんだ、“停バス”と言わないと運転さんはわからないよ！」バス中の乗客全員もすぐにうなずいて、大笑いしたのだ。……(中略)温桂はようやく次の駅でバスを降り、そのバス停に大きなバス車内禁煙の張り紙を目にした。そして、ヘビースモーカーの彼は、これからの通勤はどうすればいいのかと悩み始めた……

この作品はユモアに現地で用語の混乱さを描いている。中国語で「停車」は正確で、「停バス」という言い方はないのである、勝手にほかの言語の感覚で用語を作ってしまうのは、この社会環境ならではの発想であろう。

マレーシアは多民族国家であり、各言語の系統も異なる、実際華語といっても、近年現地の教育方針により、北京から教師を招くようになったのだが、従来移民の大多数が福建、広東からであり、方言的華語はすでに生活に定着している。また上述で触れた中国現代史の理由背景により、中国の閉鎖状態が続く時期、長い間、文学関連者を含めた大勢の華人が台湾で教育を受け、作家として台湾にとどまった結果、その名残として、生活と文学における用語表現は、台湾社会の習慣を帯びることも少なくないである。要するに、華語で生活または創作に当たって、地域的方言の表現は、すでに根付いてしまった習慣であるため、避けられないのである。この点に関して、現地の華文教育としても問題視されているが、マレーシア社会だからこそあるこの特徴は、当分華人社会では伝承し続けることだと考える。

結 び

これまで述べてきたように、マレーシアの華文創作は、歴史、政治と言語の政策に影響を受け、多くの問題を抱えている。本論で取りあげたいいくつかの作品を含めて、作品集の作者たちは、華人社会だけが描写の対象ではなく、マレーシア社会全体にわたって、その土地で生活している人々の営みを様々な視点で描き、問題提起をしている。本論が触れた幾つかの問題点の作品のほかに、作者たちは、マレーシアという国の問題を全面的に描写している作品も多くみられる。その部分に関して、次の課題で考察する。

注

- 注1 東南アジア地区において、既にシンガポールの現代華文文学についての研究論文を3編発表している。①「シンガポール当代華文文学への視角」筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報26号 2014②「シンガポール現代華文文学の日本描写についての一考察」筑紫女学園大学・短期大学部紀要 第10号2015③「現代華文文学にみるシンガポール社会問題の諸相」筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報27号 2015を参照。
- 注2 《回家》- 马来西亚华文微型小说选 钦鸿・闻彬主编 江苏凤凰文艺出版社 2014
- 注3 《二十一世紀華文文学の新動向》龔鵬程等主編（文化与文学—第一屆新世紀文學文化研究的新動向研討會論文集）新加坡南洋學社 2002（頁 13-38）を参照。
- 注4 《世界華文新文学史》下編（頁 1445）を参照。
- 注5 《世界华侨华人简史》 第4章 「從华侨社会到华人社会的转型」（P170）を参照。
- 注6 《马来西亚高校汉语作为二语教学发展研究》 第一章 第2節（P43）を参照。

主な参考資料

- 世界华侨华人简史 庄国土 主編 暨南大学出版社 2014
- 世界華文新文学史（上・中・下） 馬森 著 INK 印刻文学生活雜誌出版有限公司 2015
- 马来西亚高校汉语作为二语教学发展研究 叶婷婷 著 中央民族大学出版 2013
- 东南亚华文教育 周聿峨 著 暨南大学出版社 1995

（せき きりん：アジア文化学科 教授）

現代マレーシア華文文学への視角

石 其 琳

A Perspective on Contemporary Chinese Literature in Malaysia

Kilin SEKI

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報

第27号
2016年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 27
2016